

第189回「河川文化を語る会」  
平成28年 7月14日  
於：とやま自遊館

# 立山曼荼羅に表徴された 常願寺川水系の 水神信仰

福江 充（北陸大学未来創造学部准教授）



大日岳と常願寺川

# 講演概要

常願寺川は大山町・立山町の北アルプスを源流とし富山市水橋で富山湾へ注ぐ1級河川である。約48の支流をもつ。同河川の右岸段丘上には白岩藪ノ上遺跡や吉峰遺跡、二ツ塚遺跡、稚児塚古墳など、多くの遺跡が分布している。

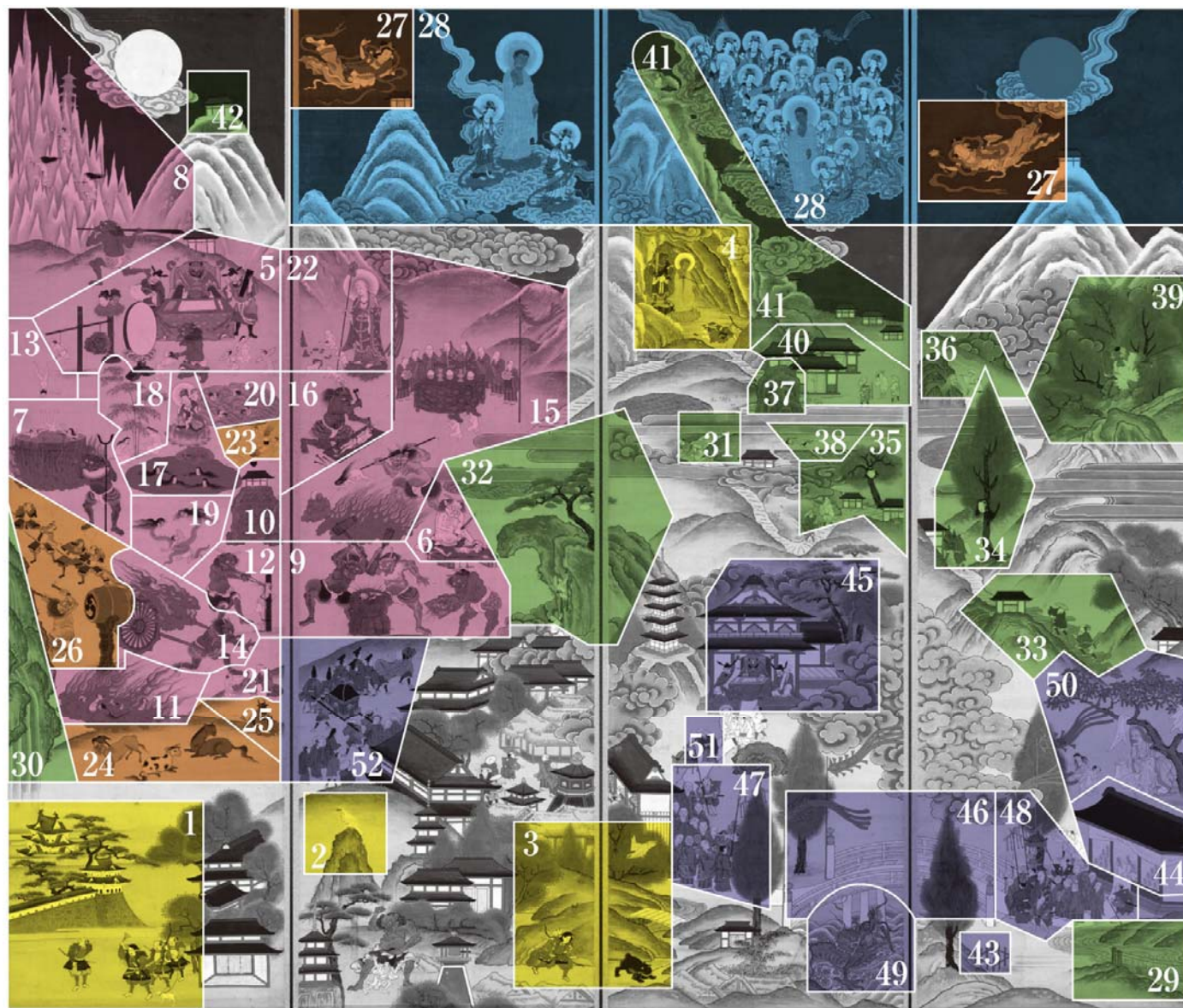
また、平安時代には常願寺川に沿って立山山中に入る山岳修行者の存在がうかがわれ、さらに鎌倉時代にはすでに、常願寺川の段丘上に芦嶽寺や岩嶽寺などの立山信仰の拠点集落が幾つか存在していた。

本講演では、江戸時代に芦嶽寺や岩嶽寺の衆徒たちが布教活動で用いた立山曼荼羅を題材として、そこに描かれた、刈込池の龍や芦嶽寺の姥尊、奪衣婆、そして布橋下の大蛇などの画像の意義を読み解きながら、常願寺川水系における水神信仰の一端を紹介したい。

# 立山曼荼羅



『立山曼荼羅 大仙坊A本』（個人蔵・絹本4幅・133.0cm×157.0cm〔内寸〕）



立山曼荼羅「大仙坊 A 本」(絹本 4 幅・大仙坊所蔵) の画像を活用した図像分節及び名付図

- 1 布施城。鷹狩りに出かけた佐伯有頼と家臣。逃げた白鷹。
- 2 佐伯有頼が熊に矢を射る。矢は熊に命中するが、熊は傷を負ったまま逃げる。それを追いかける佐伯有頼。
- 3 玉殿窟。玉殿窟に顕現した矢疵阿弥陀如来と不動明王。その靈験に平伏する佐伯有頼。
- 4 閻魔王庁。閻魔王と冥官。浄玻璃鏡。首枷の亡者。檀茶幢。業秤。
- 5 獄卒が鋭利な刃物で亡者の肉を捌く(等活地獄)。
- 6 獄卒が亡者を頑丈な鉄釜で煮る(等活地獄、瓮熟処)。
- 7 劍(針)の山の劔岳(等活地獄、刀葉林)。
- 8 獄卒が亡者を臼に入れ、杵で搗き潰す(衆合地獄)。
- 9 亡者が鉄の部屋に閉じこめられて炎で焼かれる(叫喚地獄)。
- 10 亡者が二百肘の厚さの猛火で焼き尽くされる(叫喚地獄、雲火霧処)。
- 11 獄卒が熱く熱せられた金挟みで亡者の舌を挟んで抜き出す(大叫喚地獄、受無辺苦処)。
- 12 亡者が二千年かけて阿鼻地獄に墮ちていく(阿鼻地獄)。
- 13 火車(阿鼻地獄)。
- 14 目連救母説話(阿鼻地獄)。
- 15 大施餓鬼法要。
- 16 獄卒が亡者に釘を打ち込む(等活地獄)。
- 17 血の池地獄と如意輪観音菩薩。
- 18 石女地獄。
- 19 両婦地獄。
- 20 寒地獄。
- 21 能「善知鳥」(片袖幽霊譚)。
- 22 賽の河原と地藏菩薩。
- 23 餓鬼道。
- 24 畜生道。
- 25 森尻の智明坊(畜生道)。
- 26 阿修羅道。
- 27 天女(天道)。
- 28 阿弥陀聖衆来迎(阿弥陀如来と観音菩薩・勢至菩薩の阿弥陀三尊来迎、阿弥陀如来と二十五菩薩の来迎)。
- 29 藤橋。
- 30 称名滝。
- 31 伏拝。
- 32 一ノ谷の鎖場・獅子ヶ鼻。
- 33 材木坂。
- 34 美女杉。
- 35 秃杉。
- 36 姥石。
- 37 鏡石。
- 38 精霊田(餓鬼の田圃)。
- 39 天狗山・天狗平の天狗。
- 40 室堂小屋。
- 41 一ノ越・五ノ越、雄山山頂に立つ立山峰本社。
- 42 別山山頂の硯ヶ池。
- 43 影向石。
- 44 娼堂と娼尊像。
- 45 閻魔堂と閻魔王像。
- 46 布橋。
- 47 引導師の式衆。
- 48 来迎師の式衆。
- 49 娼谷川の大蛇。
- 50 奪衣婆と衣領樹。
- 51 布橋灌頂会の参列者。
- 52 立山大権現祭礼。

凡例..

本図の1、4の図像(黄色)は、立山開山縁起に関わるものである。

本図の5、22の図像(赤色)は、立山地獄に関わるものである。

本図の23、27の図像(橙色)は、六道のうち地獄道と人道を除く、餓鬼道・畜生道・阿修羅道・天道に関わるものである。

本図の28の図像(青色)は立山浄土に関わるものである。

本図の29、42の図像(緑色)は立山禪定登山案内に関わるものである。

本図の43、51の図像(紫色)は布橋灌頂会と立山大権現祭礼に関わるものである。



『立山曼荼羅 佐伯家本』 (個人蔵、富山県 [立山博物館] 寄託資料)



# 立山曼荼羅とは？

立山曼荼羅は、立山にかかわる山岳宗教、いわゆる、「立山信仰」の内容が、大きなものでは縦160cm×横240cmの大画面に網羅的に描かれた掛軸式絵画のことである。これまでに各地で50点の作品が確認されている。

画面には、立山の山岳景観を背景として、この曼荼羅の主題である「立山開山縁起」のいくつかの場面をはじめ、立山地獄の様子、阿弥陀如来と諸菩薩の来迎場面、立山山麓・山中の名所や旧跡、芦峯寺布橋灌頂会の様子などが、マンダラのシンボルである日輪（太陽）・月輪（月）や参詣者などとともに、巧みな画面構成で描かれている。

## 立山曼荼羅を用いた布教活動

こうした立山曼荼羅は、立山信仰を護持し、各地で勧進布教をした立山衆徒（芦峯寺衆徒と岩峯寺衆徒）に絵解きされ、立山信仰の世界観や御利益が、庶民のみならず徳川將軍夫人や江戸城大奥女中、幕府老中や諸大名など、最上流の人々にまで、幅広く受け入れられた。

立山信仰は山中の血の池に由来する血盆経信仰や布橋灌頂会など、女人救済に特徴があった。信徒には新吉原の遊女も見られ、また作品のなかには天璋院篤姫や皇女和宮にゆかりの立山曼荼羅も存在する。

# 布橋灌頂会







『立山曼荼羅 大仙坊A本（布橋灌頂会の場面）』（個人蔵・絹本4幅・133.0cm×157.0cm〔内寸〕）

## 芦峯寺で行われた布橋灌頂会

江戸時代、越中立山は山中に地獄や浄土がある“あの世”と考えられていた。

人々はあの世の立山に入山することで擬似的に死者となり、地獄の責め苦に見立てられた厳しい禅定登山を行うことで、自分の罪を滅ぼして下山する。こうして新たな人格・生命に再生し、現世の安穏や死後の浄土往生が約束された。

しかし、当時の立山は女人禁制の霊場であった。そこで、江戸時代、毎年秋彼岸の中日に山麓の芦峯寺村（現、富山県中新川郡立山町）では、男性の禅定登山と同義の儀礼として、村の閻魔堂・布橋・姥堂の宗教施設を舞台に、女性の浄土往生を願って「布橋大灌頂」と称する法会が開催された。

## 布橋灌頂会の内容

地元宿坊衆徒の主催により、全国から参集した女性参詣者（実際は男性参詣者も参加していた）は閻魔堂で懺悔の儀式を受け、次にこの世とあの世の境界の布橋を渡り、死後の世界に赴く。

そこには立山山中に見立てられた姥堂（芦峯寺の人々の山の神を根源とする姥尊が祀られている）があり、堂内で天台系の儀式を受けた。

こうして、すべての儀式に参加した女性は、受戒し血脈を授かり、男性のように死後の浄土往生が約束されたのである。



## 布橋灌頂会と大蛇伝承

なお、芦嶺寺村の伝承では、布橋大灌頂の参加者は、白布が敷き渡された布橋を目隠しをして渡ったが、信心が薄く、邪心のある者は、布橋が細蟹（クモのこと。また、クモの網）の網糸より細く見えてうまく渡れず、橋から姥谷川に転落し、その川に棲む大蛇に巻かれて死んでしまうという。



『立山曼荼羅 大仙坊A本（布橋下・姥谷川の龍〔大蛇〕）』（個人蔵・絹本4幅・133.0cm×157.0cm〔内寸〕）

# 芦峯寺の布橋灌頂会イベント

布橋灌頂会は、江戸時代後期、立山信仰の各地での浸透とともに盛んに行われたが、明治の廃仏毀釈で廃止された。

布橋は昭和45年（1970）に立山風土記の丘の一施設として復元された。

平成8年（1996）に布橋灌頂会イベントが国民文化祭の一環で、立山町のイベントとして開催される。

平成17年（2005）以降、布橋灌頂会イベントが、地元住民らによる実行委員会が中心となって開催されている。

平成23年（2011）に橋灌頂会イベントが「日本ユネスコの未来遺産」に登録された。

平成26年（2014）には布橋灌頂会を130年ぶりに再現させたとして、「布橋灌頂会実行委員会」が、地域文化の発展に貢献した団体などに贈られる「サントリー地域文化賞」を受賞した。

平成17年（2005）以降、布橋灌頂会イベントが、地元住民らによる実行委員会が中心となって開催されている。

平成23年（2011）に橋灌頂会イベントが「日本ユネスコの未来遺産」に登録された。

平成26年（2014）には布橋灌頂会を130年ぶりに再現させたとして、「布橋灌頂会実行委員会」が、地域文化の発展に貢献した団体などに贈られる「サントリー地域文化賞」を受賞した。



# 芦峯寺の姥尊信仰



『立山曼荼羅 大仙坊A本（姥堂・姥尊・奪衣婆）』（個人蔵・絹本4幅・133.0cm×157.0cm〔内寸〕）

江戸時代、立山信仰の拠点村落である芦峯寺は加賀藩の支配下に置かれ、38軒の宿坊を構え、同藩の祈願所や立山禅定登山の基地としての役割を果たしていた。宿坊の主人は加賀藩の身分支配上は宗教者として扱われ、衆徒と称された。

芦峯寺衆徒は実生活上は焼畑も行い半僧半俗のかたちをとっていた。同時代、芦峯寺集落には、芦峯中宮寺の施設として姥堂・閻魔堂・帝釈堂・布橋・立山開山堂・講堂・拝殿・大宮・若宮・立山開山廟所などが建ち並んでいた。このうち姥堂は、江戸時代、姥谷川の左岸、閻魔堂の先の布橋を渡った所に、入母屋造、唐様の建築様式で立っていた。

堂内には本尊3体の姥尊像が須弥壇上の厨子に祀られ、さらにその両脇壇上には、江戸時代の日本の国数にちなみ、66体の姥尊像が祀られていた。その姿は乳房を垂らした老婆で、片膝を立てて座す。容貌は髪が長く、目を見開き、中には口をカッと開けたものや般若相のものもあり、いかにも恐ろしげである。

現存の像は、いずれも南北朝時代（現存最古の姥尊は永和元年〔1375〕に成立したものである）から江戸時代にかけて作られている。

この異形の姥尊は、芦峯寺の人々にはもとより、越中国主佐々成政や加賀初代藩主前田利家らの武将たちにも、芦峯寺で最も重要な尊体と位置づけられ、信仰された。



芦峯寺が立山信仰の宗教村落になる以前から、同村には獵師や柚・木挽などの山民や焼畑農民が存在しており、彼らは山の神に対する信仰をもっていたと推測される。それは縄文時代につながるものかもしれない。芦峯寺の姥尊は、まずこうした山の神を起源とするものであろう。

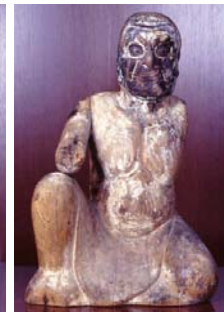
姥尊は、その後、同村が宗教村落として展開していくなかで、鎌倉時代頃から日本で盛んになった外来の十王信仰の影響を受け、南北朝時代頃までには、三途の川の奪衣婆と習合した。

江戸時代になると奪衣婆の信仰が庶民に広まり、ますます盛んになるにつれ、芦峯寺の姥尊も奪衣婆そのものになっていった。しかし、おそらく妖怪的な奪衣婆では、外部者に対して体裁が悪かったのだろう。そこで衆徒たちは姥尊の縁起を作り、それに仏教の尊格を当てた。

まず姥尊を立山大権現の親神とし、次に阿弥陀如来・釈迦如来・大日如来・不動明王などの本地を説き、それが垂迹して、醜いけれども奪衣婆的な姥尊の姿で衆生を救済するのだとした。



芦峯寺姥堂と姥尊





『高割山草高并御寄進高絵図』 (部分・個人蔵)





『芦峯寺高割山草高并御寄進高絵図』（部分・個人蔵）



蛇ワミ (富山県中新川郡立山町芦峯寺)

# 立山カルデラの 刈込池と竜神



常願寺川流域図



# 立山カルデラ

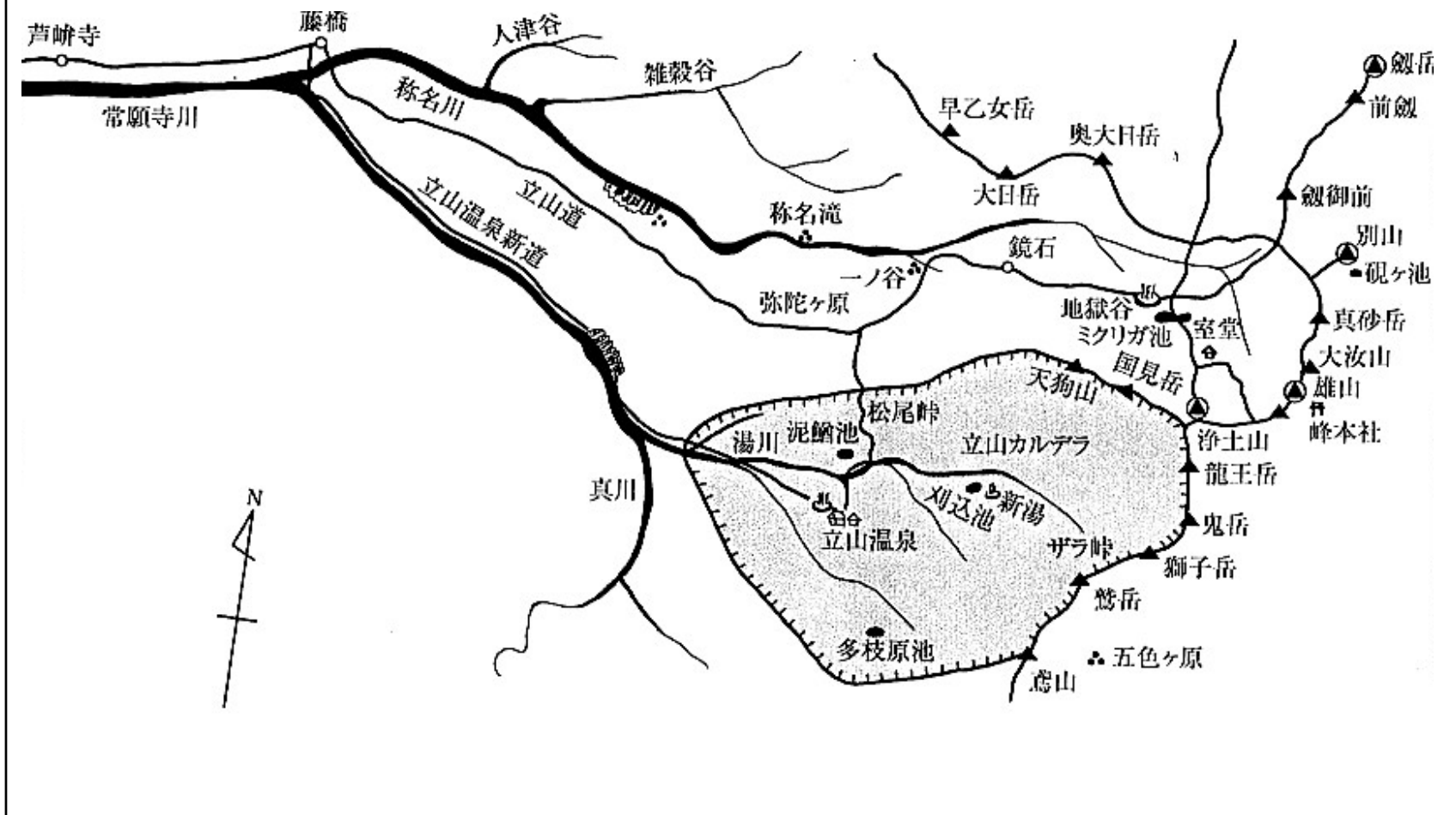
立山の弥陀ヶ原台地の南隣に立山カルデラと呼ばれる火山性の巨大な凹地がある。それは、周囲を標高2000メートルから3000メートル級の弥陀ヶ原台地、浄土山、竜王岳、獅子岳、五色ヶ原台地などに囲まれた、東西6.5km、南北4.5km、面積約23平方kmの楕円形の凹地である。

その中央部を常願寺川（富山県大山町・立山町の北アルプスを源流とし、富山市水橋で富山湾に注ぐ一級河川）の上流にあたる湯川が流れ、三方は急峻なカルデラ壁に囲まれている。

この一帯はたびたびカルデラ壁が崩壊し、土砂が堆積、あるいは大雨のたびに下流に流出するため、地形の変化が著しい。

そうした最大規模ともいえる崩壊が、安政5年（1858）の飛越（飛騨・越中）大地震の時に起こった。カルデラ南壁の大鳶が大崩壊し、膨大な土砂がカルデラ内に堆積、あるいはカルデラ外に流出したのである。

# 立山周辺地図



## 刈込池と竜神

立山カルデラ内には、「刈込池」  
(狩籠池・狩込池などとも表記される)  
と呼ばれる池があったが、大鷲の大崩  
壊で消滅した。だが、その時にできた  
別の池が新たに刈込池と名づけられ、  
今日に至っている。

なお、かつての刈込池の跡地は古刈  
込池と名づけられている。

刈込池については、幾つかの文献によりその宗教的な性格がうかがわれる。

例えば、江戸時代中期の百科事典『和漢三才図会』には、天狗岳の峰に狩籠池の神である竜神を祀った社があると記す。また、明治18年（1885）に竹中邦香が記した『越中遊覧誌』には、刈込池が常願寺川上流の真川の水源地（真川は常願寺川の本流。実際の源流は北俣岳）であり、そこに神がいるとする。

さらに、明治23年（1890）に杉木有一が記した『越中国誌』には、刈込池が常願寺川上流の湯川の水源地で、そこに蟠竜が棲むとする。

これらの文献が示すように、刈込池が人々には常願寺川の水源地とみなされ、そこには竜神が棲んでいると信じられていたことがわかる。

『越中立山古記録』や『越中立山古文書』所収の  
芦峯寺文書や岩峯寺文書には、立山衆徒による刈込  
池での雨乞儀式に関する記載がみられる。

それらより、立山衆徒や山麓の人々は、刈込池を  
常願寺川の水源地とみなしており、さらにそこには水  
田稲作に必要な水の供給や制御を司る水神としての  
竜神が棲んでいると信じていたことがわかる。

それゆえ、加賀藩領内では日照りが続くと、慣例  
的に芦峯寺や岩峯寺の衆徒が藩や村役人の依頼を受  
け、刈込池で雨乞の祈禱を行っていた。

宝永6年（1709）6月頃、連日厳しい日照りに見舞われていたようで、同月28日、芦嶽寺衆徒は黒崎村（富山市）の三郎右衛門から雨乞の依頼を受けた。そこで芦嶽寺衆徒が刈込池で祈祷を行ったところ、その効果があって7月2日まで大洪水となり、祈祷料を得ている。

その後、同年8月10日に、今度は岩嶽寺衆徒が天正寺村（富山市）十村の十右衛門から雨乞の依頼を受けている。

翌11日、衆徒六名が狩籠池へ向けて登山しようとしたが、途中、芦嶽寺一山より、8月1日以降は山仕舞い（閉山）であることを理由に無理やり追い返されたので、狩籠池での祈祷を断念している。

その代わりとして、岩嶽寺衆徒は8月14日に岩嶽寺前立社壇で雨乞の祈祷を行っているが、狩籠池での祈祷を妨害した芦嶽寺衆徒に対する不満はおさまらず、8月18日に芦嶽寺衆徒の暴挙を加賀藩寺社奉行に訴え出ている。

水神が山中の水源地に水分神として祀られる場合は、山の神と同一視されることが多いが、刈込池の竜神も立山の山の神とみてよいだろう。

それは、前述の岩嶺寺文書のなかで、岩嶺寺衆徒が加賀藩に対して「立山狩籠池は立山大権現（本地は阿弥陀如来）が竜神を狩籠めなされ置いた（封じ込めた）池である」と説明していることや、刈込池にまつわる地元の伝説のなかに、この池に立山山中の悪竜悪蛇を封じ込めたとするものがあることからもうかがわれる。

こうした、霊山の水分神である竜蛇神を池に封じ込めるといった内容の伝説には、白山の開山者泰澄が悪竜悪蛇を千蛇ヶ池に封じ込めたとする伝説や、日光の開山者勝道が悪蛇を封じ込めたとする伝説がある。

そしてこれらの伝説には、前章で述べた立山開山縁起の本来的な意味と同様、古来、山中の水源地を支配してきた水分神である竜神が、外来の仏教の仏に押さえ込まれたといった意味がある。



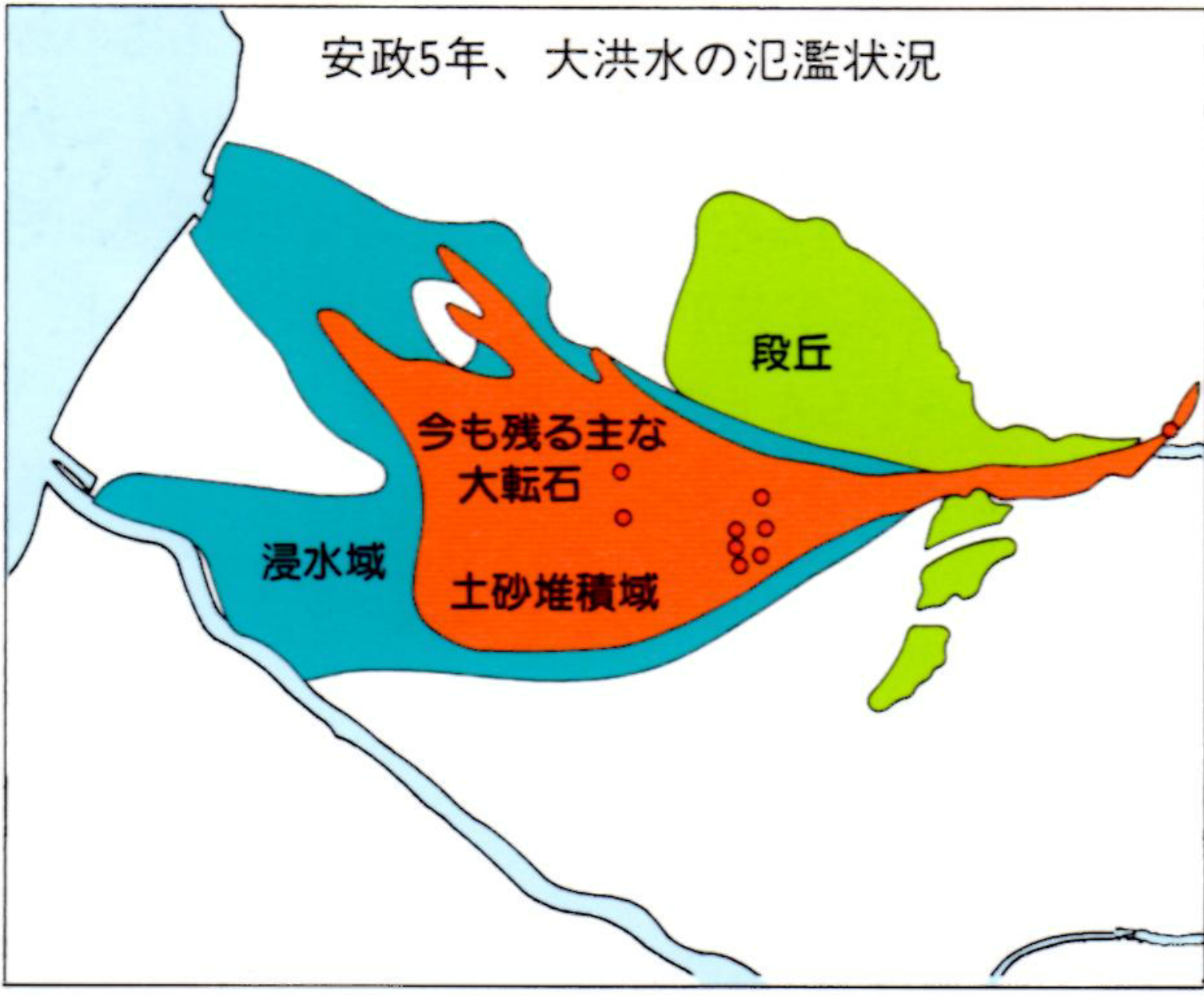
『立山曼荼羅 坪井家A本』 (個人藏、富山県 [立山博物館] 寄託資料) 作成時期：天保元年 (1830) 以前





『立山曼荼羅 坪井家A本（刈込池の部分）』（個人蔵、富山県〔立山博物館〕寄託資料）作成時期：天保元年（1830）以前

安政5年、大洪水の氾濫状況





水神碑（立山町西大森） 土台は安政の大転石。巨大な転石体は堤体の中。